



# 高原遺跡発掘調査報告書

一般県道津原穴沢線地方特定道路  
整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

鳥取大学附属図書館



0050277441

平成13年度

倉吉市教育委員会

## 序

この報告書は、鳥取県倉吉土木事務所が実施する一般県道津原穴沢線地方特定道路整備工事に伴う事前調査として、平成12年度から13年度にかけて鳥取県倉吉市谷字高原・字屋敷・字五輪畠において行った高原遺跡発掘調査の記録です。

今回の調査は、道路新設範囲にかかる丘陵斜面部の限られた調査ではありましたが、弥生時代の中頃から終り頃にかけての集落と土壙墓群、古墳時代初め頃の方墳群と終り頃の横穴式石室など多くの遺構を確認しました。

弥生時代の終り頃は、生活区域と墓域とを区別している様子がわかります。なかでも、火災で焼失した住居から銅製の破碎鏡の出土、土壙墓からガラス製の管玉の出土はともに本市では例がなく、当地方における弥生時代の集落を研究するうえで貴重な資料であるといえます。

調査にあたりご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所、地元関係者、発掘作業や内務整理作業に従事していただいた方々をはじめ、関係機関、各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成14年3月

倉吉市教育委員会  
教育長 八田 洋太郎



## 例　　言

1 本報告書は、一般県道津原穴沢線地方特定道路整備工事に伴う事前調査として、平成12年度・13年度に倉吉市教育委員会が、倉吉市谷字高原・字屋敷・字五輪橋において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査体制は次のような組織・編成である。

調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会文化財課

八田洋太郎（倉吉市教育委員会教育長）　豊山 敏（教育次長）

眞田 広幸（文化課課長）　藤井 晃（課長補佐兼文化財係長）

藤井 敏子（文化財係主任）　森下 哲哉（文化財係主任）　根鈴智津子（文化財係主任）

加藤 誠司（文化財係主任）　岡本 智則（文化財係主任）　岡平 拓也（文化財係主任）

山崎 昌子（文化財係主任）　金田 朋子（臨時職員）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・松嶋あづ子・竹原 晚子・山本 錦・湯浅 博・前坂 英樹・明里 千秋

3 現場での調査、報告書作成は岡本が担当し、金田・松田・泉・世浪・松嶋が補佐した。遺物撮影は岡本が担当し、加藤・岡平が補佐した。

4 ガラス製管玉の分析は、奈良文化財研究所 肥塚隆保氏、岡山理科大学自然科学研究所藤山分室 白石 純氏、ライフパーク倉敷市民学習センター 繩野早苗氏にお世話をになった。

5 第1図（地形図）は、国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、1:2,500 地図基本図 倉吉市平面図を使用した。

6 掘団中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

7 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

I 発掘調査に至る経過	1	図版1 調査後全景	4
II 位置と歴史的環境	1	図版2 1号・2号・4号住居 6号貯蔵穴	
III 調査の概要	3	18号土壙墓 25号土壙	7
IVまとめ	33	図版3 3号住居	8
報告書抄録		図版4 5号住居 21号・22号土壙墓	9

## 挿図目次

第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	2	図版5 6号・7号住居	10
第2図 高原遺跡調査区位置図	3	図版6 8号・9号・14号住居	11
第3図 高原遺跡遺構全体図	5	図版7 10号住居	12
第4図 3号住居遺構図	8	図版8 11号・15号住居	13
第5図 10号住居遺構図	12	図版9 12号・13号・16号住居	14
第6図 1号・2号・6号土壙墓遺構図	18	図版10 1号・2号住居状遺構 1号掘立柱建物	15
第7図 7号・16号・20号・34号土壙墓遺構図	19	図版11 1号・7号貯蔵穴	16
第8図 1号～5号墳平面図	24	図版12 5号・8号・11号・18号・26号	
第9図 1号墳1号・2号主体部遺構図	26	33号～35号・38号土壙墓	20
第10図 2号墳1号主体部・1号埋葬施設遺構図	27	図版13 2号溝 3号住居埋土上層陶土器	
第11図 4号墳1号・2号主体部遺構図	29	鉄製品 玉類	22
第12図 4号墳1号・2号主体部遺構図	30	図版14 磨製石斧・砥石・敲石	23
第13図 5号墳1号主体部遺構図	30	図版15 古墳群 1号墳	25
第14図 1号・5号・6号・8号・9号住居	32	図版16 1号墳1号・2号主体部	26
2号溝出土土器	32	図版17 2号墳	27
第15図 3号住居埋土上層陶土器	33	図版18 3号・4号墳	28
第16図 1号墳2号主体部出土土器	34	図版19 4号墳1号・2号主体部	29
第17図 4号墳1号・2号主体部出土土器	35	図版20 5号墳1号主体部	30
第18図 破碎鏡・鉄製品・玉類・石製品・土製品	36	図版21 1号施式石棺墓	31
第19図 ガラス管玉J15の蛍光X線スペクトル	37	図版22 鑑定（ガラス管玉）	37

## I 発掘調査に至る経過

平成11年度、一般県道津原穴沢線地方特定道路整備工事の計画が、鳥取県倉吉土木事務所から倉吉市教育委員会に提示され、埋蔵文化財の有無の照会があった。当該地とその周辺は、大塚山古墳や遺物散布地などの遺跡が知られているところであった。現状の計画で工事が進捗すれば、遺跡が大きく破壊されると判断されたが、法線の変更は民家および地形上から難しい状態であったため、遺跡の破壊を最小限に抑えた計画が検討された。倉吉市教育委員会は、平成11年11月から12月にかけて試掘調査を実施し、倉吉市谷字高原・字屋敷・字五輪畠において、竪穴式住居と弥生時代から中世に至る遺物の散布を確認した。試掘調査の結果、倉吉市教育委員会は、鳥取県倉吉土木事務所と協議を行い、工事範囲のうち6,000m<sup>2</sup>について、平成12年度2,000m<sup>2</sup>、13年度4,000m<sup>2</sup>の2カ年にわたって発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会が主体となって現地調査を平成12年9月29日～13年2月1日、平成13年6月18日～平成14年1月11日まで実施した。

註 岡本智則「8 谷・津原地区(高原遺跡)」「倉吉市内遺跡分布調査報告書II」 倉吉市教育委員会 2001年

## II 位置と歴史的環境

高原遺跡は、倉吉市街地から北西へ約7km離れた谷地区と津原地区との境を、南西方向から北東方向へなだらかに延びる丘陵の尾根筋からやや南へ下った斜面部分（標高20～25m）に位置する。水田面との比高差は約20m。遺跡周辺は、大山（標高1,711m）の火山活動によって形成された洪積世丘陵が、なだらかな勾配をもって細長い谷に樹枝状に入り組んだ丘陵を構成し、丘陵の北側は由良川を中心に低湿地が広がる。この低湿地は灘手低湿地とよばれ、かつては入り海であった。本遺跡の周辺には、同一丘陵の北西約50m離れたやや北斜面側に大塚山古墳（3・全長52m・前方後円墳）が所在するのをはじめ、弥生時代から古墳時代の遺跡が数多く分布する。以下、遺跡分布図（第1図）を中心にな主要な遺跡について述べる。

弥生時代は、大山の火山活動により形成された倉吉市西郊の久米ヶ原丘陵を中心に集落跡が存在する。前期には松ヶ坪遺跡、後中尾遺跡、イキス遺跡（34）、宮ノ峰支群がみられる。中期には、大栄町大谷第1遺跡・水晶の玉作工房の大栄町西高江遺跡・環濠集落の後中尾遺跡・福田寺遺跡・沢ベリ遺跡・遠藤谷峯遺跡（41）・中峯遺跡（45）・中尾遺跡・西前遺跡が確認されている。後期になると急速な人口増加とともに集落が拡散する。主なものとして、後中尾遺跡・中峯遺跡・夏谷遺跡・西前遺跡・クズマ遺跡（30・31）・大沢前遺跡（43）・中尾遺跡・遠藤谷峯遺跡・白市遺跡（42）・沢ベリ遺跡・服部遺跡・観音堂遺跡・矢戸遺跡などの集落が出現し古墳時代まで続く。本遺跡の所在する灘手丘陵には、コザンコウ遺跡（36）・道祖神峰遺跡（38）など小規模集落が出現する。

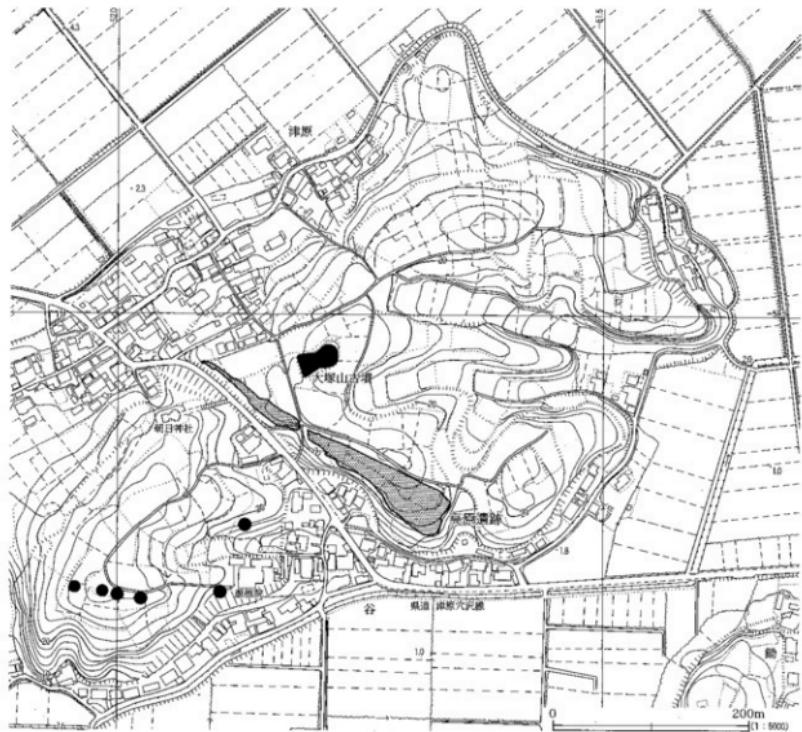
墳墓は、イキス遺跡・向山古墳群宮ノ峰支群・阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群・山根（藤和）四隅突出型墳丘墓・柴栗古墳群弥生墳丘墓・三度舞墳丘墓・大谷後口谷墳丘墓群（44）などがある。終末期から古墳時代初頭にかけては、土壙墓群から古墳へと変遷していく過程がうかがえる二タ子塚遺跡（13）・中峰古墳群がある。

古墳時代前期は、粘土櫛を主体部とし、斐鳳鏡・三角縁神獣鏡・二神二獣鏡、多量の鉄器が出土した国分寺古墳（前方後方[円]墳・全長60m）、竪穴式石槨を主体部とし、国分寺古墳とほぼ同時期に築造された宮ノ峰支群19号墳（方墳・一辺27m）・21号墳（円墳・直径30m）がある。中峰古墳群・猫山遺跡3次・二タ子塚遺跡では、一辺20m以下の小規模な方墳が周溝を共有し連続して築造される。5世紀代には、古墳群の変遷が明瞭なイザ原古墳群、造出付き円墳が5基群集する沢ベリ遺跡2次がある。古墳時代後期には、向山・大平山・上神地区周辺



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1 東龜谷古墳群	11 駄道東遺跡	21 高峰遺跡	31 クズマ遺跡2次	41 遠藤谷峯遺跡	51 法華寺遺跡跡
2 亀谷古墳群	12 二ヶ子塚6号墳	22 椎児ヶ墓古墳群	32 イガミ松遺跡	42 白市遺跡	
3 大塚山古墳	13 二ヶ子塚遺跡	23 大瀬谷遺跡	33 上神119号墳	43 大沢前遺跡	
4 西焼ス古墳群	14 菊家平古墳群	24 曲古墳群	34 イキス遺跡	44 大谷後口谷古墳群	
5 清水谷尻1号墳	15 大白峯遺跡	25 上神古墳群	35 取木遺跡	45 中峯遺跡	
6 高鼻1号墳	16 大山遺跡	26 上神44号墳	36 コザンコウ遺跡	46 向野遺跡1次	
7 高鼻2号墳	17 頭根後谷遺跡	27 上神45号墳	37 一反半田遺跡	47 向野遺跡2次	
8 高鼻遺跡	18 東鳥ヶ尾古墳	28 上神48号墳	38 遠祖神峰遺跡	48 古神宮古墓	
9 下種東古墳群	19 矢内谷峰遺跡	29 上神51号墳	39 野田古墳群	49 伯耆國守跡	
10 清水谷古墳群	20 ケンカ塚古墳群	30 クズマ遺跡1次	40 間長谷遺跡	50 伯耆國分寺跡	



第2図 高原遺跡調査区位置図

の丘陵に群集墳が多く造られる。向山古墳群は倉吉市街地の北側に存在し、600基以上の古墳が密集する。主なものに向山6号墳（前方後円墳・全長40m）、三明寺古墳（円墳？・直径18m・国史跡）があり、いずれも横穴式石室を主体部とする。波波伎神社境内にある福庭古墳（円[方]墳・35m）は整美な切石を用いている。終末期には、追葬のできない小型の横穴式石室をもつ取木遺跡(35)・一反半田遺跡(37)・両長谷遺跡(40)などがある。

### III 調査の概要

発掘調査は、南西から北東に延びる丘陵の尾根筋からやや南に下った斜面部分の道路新設部分6,000mについて実施した。基本層序は、上層から茶褐色土（表土・耕作土）、黒色土（クロボク）、褐色土（ソフトローム土）、黄褐色砂質土（ホーキ火山砂）、A T、橙褐色土（礫混じり粘質土）、黄褐色土（D.K.P.）で、調査区の北東側から南東側にかけて耕作土（20～30cm）下は橙褐色土層まで削平されていた。遺構検出面は、黄褐色砂質土と橙褐色土である。調査の結果、竪穴式住居16棟、貯蔵穴7基、掘立柱建物1棟、溝3条、土塙墓38基、古墳5基、箱式石棺墓1基、土塙25基を確認した。住居状遺構は平面形が方形ないし長方形で、ピットおよび周壁溝をもたないか、あるいは段状になるものとし、2棟確認した。

図版1



調査後全景（東から）



調査後全景（西から）

**竪穴式住居** 調査区中央の平坦面から斜面にかけて 6棟（1～5・16号）、東側の斜面で10棟（6～15号）を確認した。4号・7号住居は調査区外に広がり、集落は丘陵全体に広がると推定される。（数値）は残存する規模。

**1号住居** 調査区のはば中央、標高23m付近の斜面に位置し、25号土壙が切る。平面形は、住居の南側が斜面によって流失しているため不明だが残存部分から円形と推定される。床面規模は東西長4.88m、推定される床面積は約18.0m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さは最大0.51mである。主柱穴は4本で、中央ピットの両側に小ピットが直線的に並ぶ。遺物は、床面から弥生中期の小型壺1・甕、砥石3点 S 3～S 5・敲石1点 S 18が出土した。





1



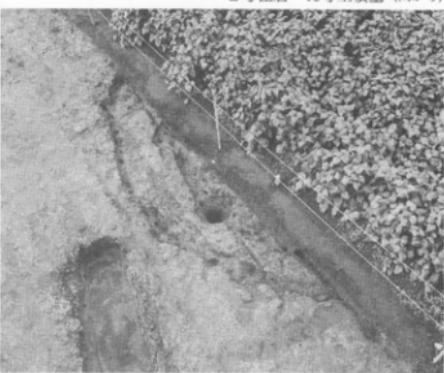
1号住居・6号貯藏穴・25号土壙(南東から)

**2号住居** 1号住居の北西約45m離れた標高24m付近に位置し、18号土壙墓に切られる。平面形は、南西側が後世の掘削により不明だが、周壁溝の形態から円形と推定される。主柱穴は不明、検出面から床面までの深さは0.12mである。遺物は、埋土中から弥生中期の土器片が出土した。

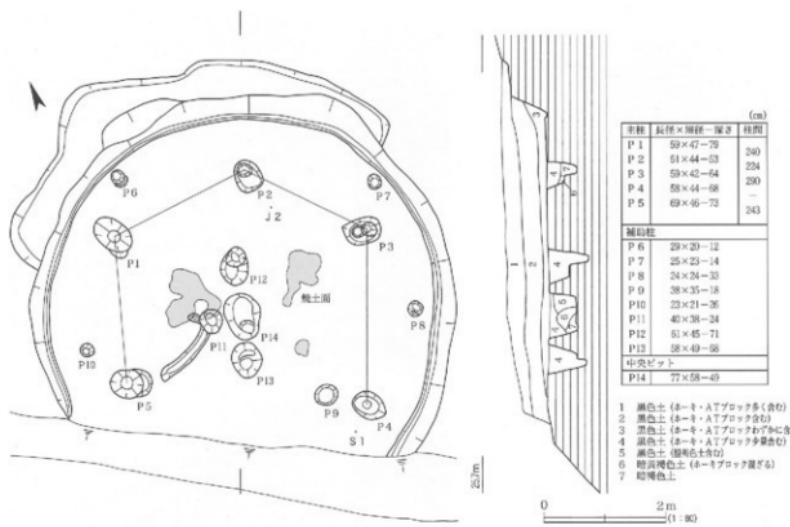


2号住居・18号土壙墓(西から)

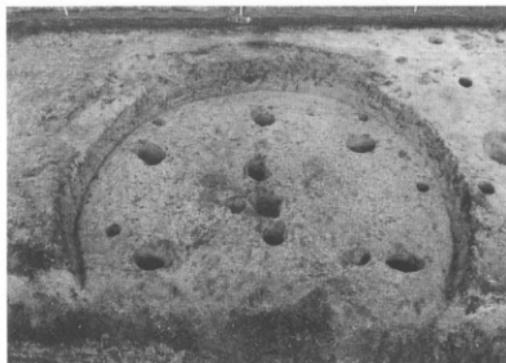
**4号住居** 3号住居の東側約20m離れた標高25.5m付近に位置する。平面形は大半が調査区外になるため全容は不明であるが比較的大型の住居と思われる。検出面から床面までの深さは最大0.03mである。埋土中から弥生中期の甕片、燧石1点S12、周壁溝から土玉D1が出士した。



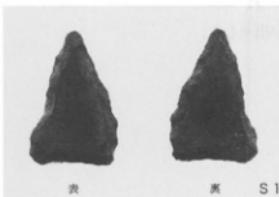
4号住居(南から)



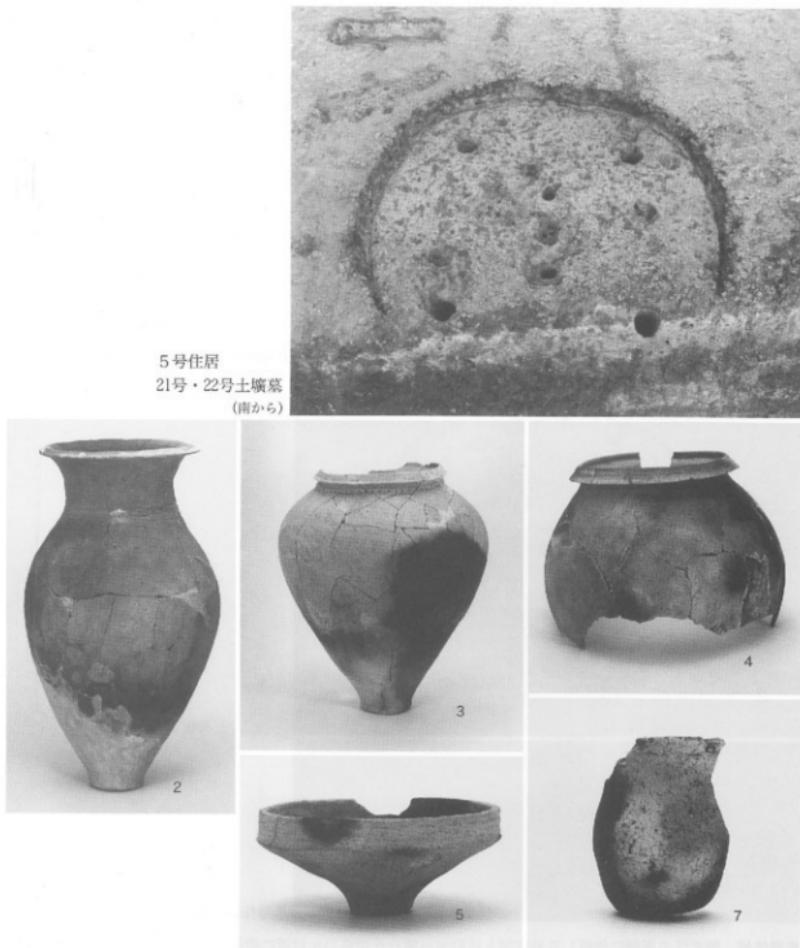
第4図 3号住居遺構図



図版3 3号住居（南から）



3号住居 1号住居の東側25m離れた標高24m付近の斜面に位置する。平面形は円形と推定される。床面規模は東西長6.32m・南北長(5.38)m、床面積約32.6m<sup>2</sup>に復元される。検出面から床面までの深さは最大0.68mで、調査区内最大規模である。主柱穴は6本で、中央ピットの両側に小ピットが直線的に並ぶ。中央ピットの周辺の床面で、厚さ1.5~2.4cmの焼上面を3カ所確認した。遺物は床面から弥生中期のガラス小玉2点J 1・J 2、磨石1点S 1、安山岩質調片4点、砥石8点S 6~S 10、磨石5点、検出面から勾玉1点J 16が出土した。また、埋土上層から3号住居廃絶後に廃棄されたと思われる弥生後期の甕14~16、甕17、台付鉢18、高杯19、器

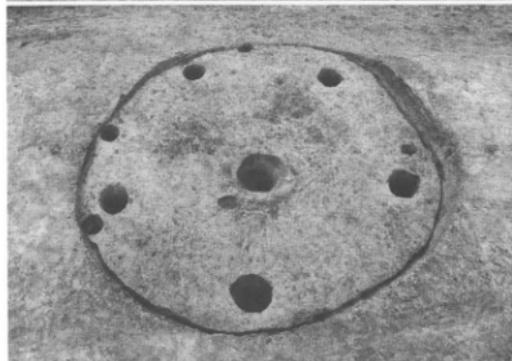


台20～22が一括で出土した。住居南西側約2m離れて位置する38号土壙墓との関連をうかがわせる。

**5号住居** 4号住居の南東側約10m離れた標高25m付近に位置する。平面形は円形と推定される。規模は東西辺4.8m・南北辺(3.7)m、推定される床面積は約18.5m<sup>2</sup>。検出面から床面までの深さは最大0.37mである。主柱穴は4本で、中央ピットの両側に小ピットが直線的に並ぶ。中央ピットの北東側の床面で、最大厚さ2.2cmの焼上面を確認した。遺物は、床面中央付近から西側にかけて集中しており弥生中期の広口壺2、甕3・4、高杯5・6、ミニチュア土器壺7、砥石4点・打製石斧軒用敲石1点S17、磨石2点が出土した。



6号住居 遺物出土状況（東から）



完掘（北から）



7号住居（南から）

**6号住居** 調査区の東側に位置し5号住居とは約54m離れた標高24m付近に位置する。平面形は円形。床面規模は東西長4.9m・南北長4.96m、床面積18.9m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さは最大0.31mである。主柱穴は5本で中央ピットをもつ。中央ピット周辺の床面で、厚さ0.3~4.4cmの焼上面を4カ所確認した。遺物は床面から弥生後期の壺、甕、鐵鎌F3、砥石2点S14、敲石1点S19、ピット内から支脚と思われる手捏土器8・9が出土した。

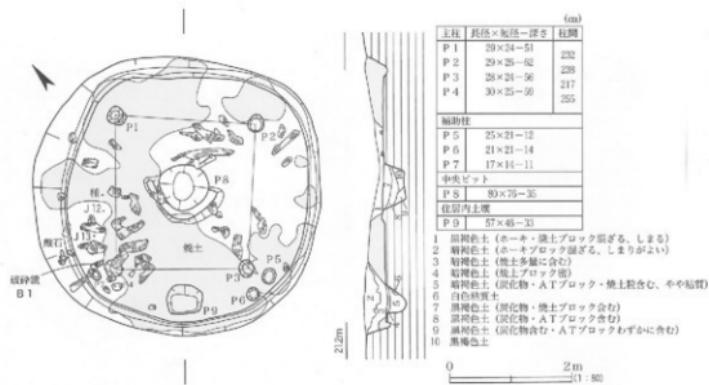
**7号住居** 6号住居の北東約18m離れた標高24mの調査区間に位置する。ほとんどが調査区外になるため全容は不明。検出面から床面までの深さは最大0.10mである。遺物は出土しなかった。



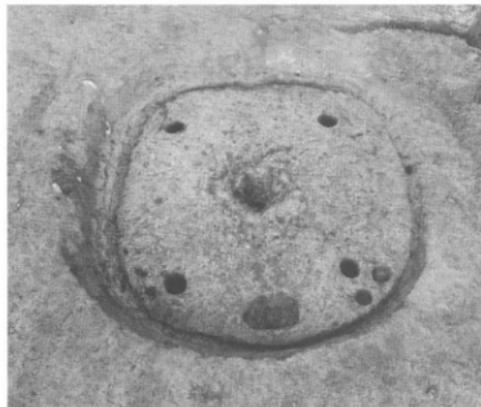
**8号住居** 6号住居の東側約12m離れた標高23.5mの傾斜変換点に位置し、14号住居に切られる。平面形は遺存状態が悪く不明。検出面から床面までの深さは最大0.14mである。主柱穴は5～6本と推定される。中央ピットの北東側床面で、最大厚さ3.0cmの焼土面を確認した。遺物は床面からガラス小玉8点J3～J10、蔽石1点S20・磨石2点・台石3点、埋土中から弥生後期の壺片、安山岩質剥片1点、ピット内からミニチュア土器壺10が出土した。

**14号住居** 標高23.5mの傾斜変換点に位置し8号住居を切る。後世の削平が著しく平面形、柱穴は不明。周壁溝の一部を確認。遺物はミニチュア土器鉢12が出土した。

**9号住居** 8号住居の東側約5m離れた標高23m付近の斜面上に位置する。後世の掘削により大半が消失し、斜面の高い西側部分が遺存する。平面形、主柱穴は不明。周壁溝が、南北部分で一部重複することから立て替えが考えられる。検出面から床面までの深さは最大1.06mである。遺物は、床面から弥生後期の壺IIが出土した。



第5図 10号住居遺構図



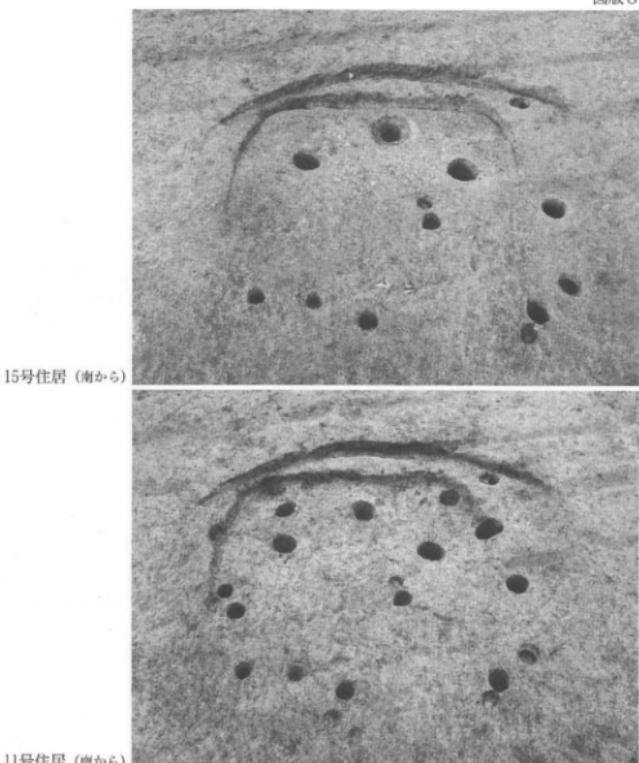
10号住居 (南から)



10号住居 破片B 1 出土状況 (南から)

図版7



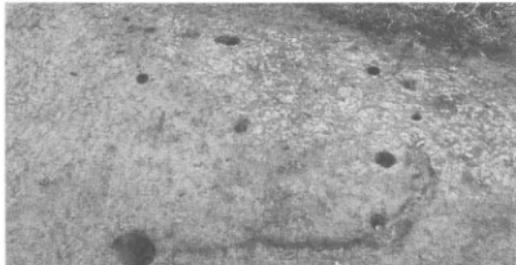


**10号住居** 調査区の南東隅、9号住居の南約18m離れた標高21m付近の斜面に位置する。焼失住居。平面形は隅丸方形。床面規模は東西径3.96m・南北径4.02m、床面積13.4m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さは最大0.72mである。主柱穴は4本で中央ピットをもつ。他に南側の壁寄りに平面形が長方形、規模0.58×0.46mのピットP9がある。P9は埋土の上層厚さ約5cmに焼土が入り込んでおり、下層からは炭化材が確認された。また、住居埋土中には焼土塊が多量に含まれており、床面を中心に炭化した建築部材が遺存していた。遺物は床面から銅製の破碎鏡1片B1、ガラス小玉2点J12・13、埋土中から弥生後期の壺、甌、ガラス小玉1点J11、安山岩質剥片1点・敲石1点S21・磨石1点が出土。

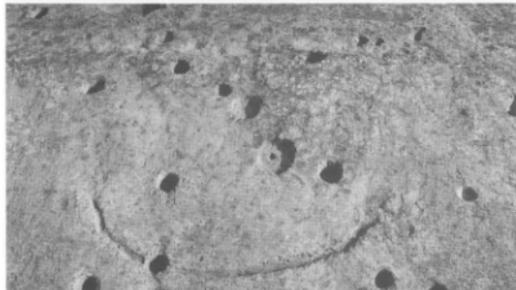
**11号住居** 10号住居の南西約7m離れた標高21mの斜面に位置する焼失住居で、15号住居に切られる。斜面の高い北側に周壁溝が遺存するが平面形は不明。検出面から床面までの深さは最大0.11mである。埋土中に焼土塊を多量に含む。遺物は、埋土中から弥生後期の甌、磨石片1点が出土した。

**15号住居** 標高21mの斜面に位置し11号住居を切る。南側は後世の掘削により遺存しないが平面形は隅丸方形と推定される。床面規模は東西辺4.1m・南北辺(2.3)m、検出面から床面までの深さは最大0.16mである。主柱穴は2本で北側の壁際にピットをもつ。床面全域に貼床が遺存する。遺物は、埋土中から弥生後期の甌、砥石1点S

図版9



12号住居（北から）



13号住居（西から）



16号住居（東から）

15・磨石1点が出土した。

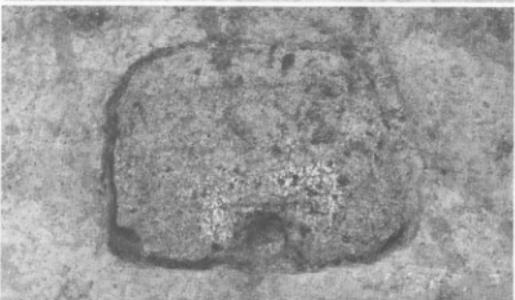
12号住居 11号住居の西側約16m離れた標高21.5m付近の斜面に位置する。斜面の高い側の周壁溝のみ確認した。平面形は隅丸方形と推定される。遺物は、埋土中から弥生後期の甕、土玉1点D2が出土した。

13号住居 8号住居の北側約7m離れた標高23.5m付近の傾斜変換点に位置する。平面形は隅丸方形と推定される。主柱穴は4本で中央ピットをもつ。遺物は出土しなかった。

16号住居 1号住居の南東側約14m離れた標高22.5m付近の斜面に位置する。平面形は円形。床面規模は東西長3.8m、南北長(3.3)m、推定される床面積は約11.2m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さは最大0.48mである。主柱穴は4本で、中央ピットの両側に小ピットが直線的に並ぶ。遺物は、埋土中から弥生中期の甕・甌、ピット内から磨



1号住居状遺構（北東から）



2号住居状遺構（北から）



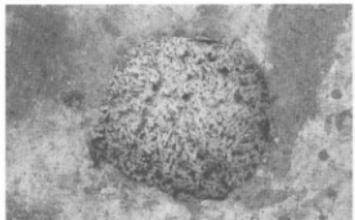
1号掘立柱建物（南西から）

石1点が出土。

**1号住居状遺構** 5号住居の南側約15m離れた標高23.5m付近の斜面に位置する。斜面に並行して東西方向に約10mの範囲でカットして平坦にしており、3本の柱穴が直線的に遺存する。周壁溝はない。柱穴間距離は3.4m、3.8mである。桁行2間の掘立柱建物の可能性が考えられる。遺物は、埋土中から土師器・土師質土器・瓦質土器の破片、磨石1点が出土した。

**2号住居状遺構** 5号住居の南西側約8m離れた標高23.5m付近の斜面に位置する。平面形は隅丸方形。柱穴は北側の壁際に1本もつ。床面および柱穴内に炭化材が遺存する。

**1号掘立柱建物** 調査区の中央、標高24.5mの緩斜面上に位置する。南側は後世の削平により遺存しない。3号・5号土壤墓を切る。主軸はN115°Eで、桁行6間×梁行4間の建物である。床面積は31.2nf、長方形度は1.5である。遺物は、柱穴内および埋土中から瓦質土器羽釜・鍋が出土した。



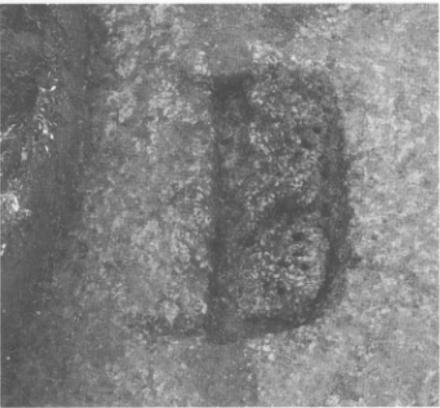
1号貯蔵穴 (東から)



2号貯蔵穴 (西から)



4号貯蔵穴 (西から)



3号貯蔵穴 (東から)



6号貯蔵穴 (南から)



5号貯蔵穴 (北から)



7号貯蔵穴 (南から)

## 貯藏穴

**1号貯藏穴** 濃査区西側の標高20m付近の緩斜面上に位置する。平面形は円形の袋状土壠で、検出面規模は $0.8 \times 1.0$ m、床面規模は直径1.1m、深さ0.35m。遺物は出土しなかった。

**2号貯藏穴** 1号住居の北西約11m離れた標高24m付近に位置する。平面形は隅丸長方形で床面規模は $1.36 \times 2.42$ m、深さ0.23m。床面に周壁溝が全周する。遺物は床面から弥生中期の壺、蔽石1点・S22・作業台石1点が出土した。

**3号貯藏穴** 2号貯藏穴の西約6m離れた標高24m付近に位置する。南側は後世の掘削により遺存しないが、平面形は隅丸長方形と推定される。床面規模は約 $1.2 \times 2.2$ m、深さ0.16mである。遺物は埋土中から弥生中期の壺が出土した。

**4号貯藏穴** 2号住居の西約7m離れた標高23m付近に位置する。平面形は不整円形の袋状土壠で、検出面規模は $0.70 \times 0.88$ m、床面規模は直径1.3m、深さ0.64m。遺物は出土しなかった。

**5号貯藏穴** 5号住居の南東約25m離れた標高23.5mの斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で床面規模は $2.44 \times 1.35$ m、深さ0.23m。埋土中から弥生土器壺片が出土した。

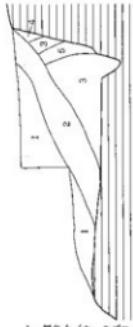
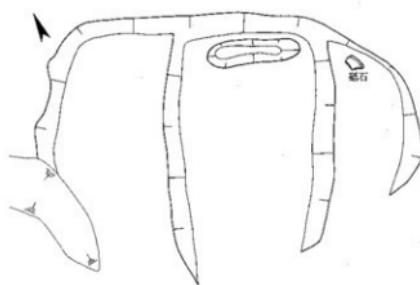
**6号貯藏穴** 1号住居の南東約4.5m離れた標高23mの斜面に位置する。平面形は不整円形で検出面規模は $1.7 \times 1.6$ m、床面規模は $1.35 \times (1.55)$ m、深さ2.4m。遺物は出土しなかった。

**7号貯藏穴** 6号貯藏穴の東約3m離れた標高23mの斜面に位置する。平面形は歪な長方形で検出面規模は $(1.4) \times (2.6)$ m、床面規模は $(1.15) \times 2.40$ m、深さ2.4m。遺物は出土しなかった。

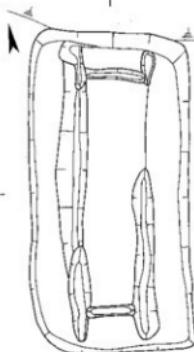
## 土壙墓一覧表

土壙墓番号	埋葬形態	平面形	掘り方規模		木棺痕跡		主軸方向	偏位	遺物	時期	その他
			上段	下段	長軸×短軸	深さ					
1	木棺墓	隅丸長方形	(2.05) × 2.83 - 0.41	(2.05) × 1.05 - 0.27	(2.70) × —	—	N24° E	E	後期	北小口掘り方あり	
2	木棺墓	隅丸長方形	2.47 × 1.18 - 0.2	—	—	—	N10° E	N	後期	北小口西側掘り方あり	
3	土壙墓	隅丸長方形	1.05 × 0.65 - 0.27	—	1.87 × 0.38 - 0.1	—	N12° E	N	—	—	—
4	土壙墓	隅丸長方形	1.81 × 0.3 - 0.24	—	—	—	N33° W	W	—	—	—
5	土壙墓	隅丸長方形	0.78 × 0.48 - 0.29	—	—	—	N120° E	SH	磨製石斧	—	—
6	木棺墓	長方形	1.88 × 0.55 - 0.15	—	—	—	N60° W	W	—	—	—
7	木棺墓	長方形	2.08 × 0.55 - 0.14	—	1.51 × —	—	N115° E	E	—	—	—
8	土壙墓	長方形	1.09 × 0.35 - 0.24	—	1.71 × —	—	N57° W	W	—	—	—
9	土壙墓	長方形	1.01 × 0.45 - 0.32	—	—	—	N54° W	W	—	—	—
10	土壙墓	長方形	0.72 × 0.31 - 0.14	—	—	—	N110° E	E	—	—	—
11	土壙墓	長方形	1.02 × 0.41 - 0.26	—	—	—	N60° W	W	—	—	—
12	土壙墓	長方形	1.50 × 0.37 - 0.63	—	—	—	N120° E	H	—	—	—
13	土壙墓	圓丸足形	0.78 × 0.27 - 0.14	—	—	—	N81° E	E	—	—	—
14	土壙墓	圓丸足形	0.85 × 0.36 - 0.12	—	—	—	N71° W	W	—	—	—
15	土壙墓	圓丸足形	(0.80) × 0.33 - 0.15	—	—	—	N45° S	S	—	—	—
16	木棺墓	長方形	0.87 × 0.4 - 0.1	—	—	—	N10° E	S	—	—	—
17	木棺墓	不明	— × — - 0.2	—	0.54 × —	—	—	—	不明	—	—
18	木棺墓	圓丸足形	2.14 × 0.58 - 0.54	—	—	—	N25° E	N	—	—	—
19	土壙墓	長方形	1.07 × 0.48 - 0.47	—	—	—	N136° E	B	—	—	—
20	木棺墓	圓丸足形	1.56 × 0.79 - 0.17	1.54 × 0.31 - 0.1	—	—	N24° W	N	—	—	—
21	土壙墓	圓丸足形	1.72 × 0.41 - 0.41	—	1.28 × — - 0.1	—	N45° W	NW	—	—	—
22	木棺墓	長方形	1.8 × 0.35 - 0.07	—	—	—	N75° W	W	—	—	—
23	土壙墓	長方形	1.6 × 0.42 - 0.12	—	1.7 × —	—	N125° E	E	—	—	—
24	土壙墓	長方形	1.35 × 0.29 - 0.8	—	—	—	N139° E	SE	—	—	—
25	土壙墓	長方形	1.75 × 0.6 - 0.26	—	—	—	N130° E	SE	—	—	—
26	木棺墓	圓丸足形	0.9 × 0.24 - 0.22	—	—	—	N112° E	E	—	—	—
27	土壙墓	圓丸足形	1.2 × 0.34 - 0.09	—	1.7 × —	—	N27° E	N	—	—	—
28	土壙墓	圓丸足形	(1.30) × 0.46 - 0.54	—	—	—	N73° E	E	—	—	—
29	土壙墓	長方形	2.03 × 0.8 - 0.27	—	—	—	N140° E	SE	—	—	—
30	土壙墓	長方形	1.54 × 0.62 - 0.13	—	—	—	N140° E	SE	—	—	—
31	土壙墓	圓丸足形	0.95 × 0.27 - 0.12	—	—	—	N135° E	SE	—	—	—
32	土壙墓	長方形	1.75 × 0.46 - 0.22	—	—	—	N112° E	E	—	—	—
33	土壙墓	長方形	0.97 × 0.3 - 0.46	—	—	—	N117° E	E	—	—	—
34	木棺墓	長方形	2.53 × 1.17 - 0.26	2.23 × 0.46 - 0.31	2.23 × 0.46 - 0.31	—	N75° W	W	—	—	—
35	土壙墓	長方形	0.81 × 0.29 - 0.05	—	—	—	N54° W	W	—	—	—
36	木棺墓	長方形	2.38 × 0.88 - 0.17	L85 × 0.54 - 0.37	L85 × 0.54 - 0.37	—	N40° W	W	—	—	—
37	土壙墓	長方形	1.83 × 0.54 - 0.19	—	—	—	N57° E	NB	—	—	—
38	土壙墓	長方形	(0.75) × 0.49 - 0.08	—	—	—	N3° E	N	ガラス管玉	—	—

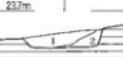
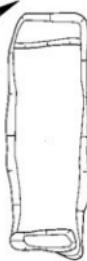
1号土塚墓



2号土塚墓



6号土塚墓



1 黒褐色土 (ホーキブロック少含む)  
2 黒褐色土 (黒褐色粘土粒含む)  
3 黑褐色土 (ホーキブロック・黒褐色粘土粒含む)  
4 黑褐色土 (ホーキブロック多量含む)  
5 黑褐色土 (ホーキブロック多量含む)

1 黒褐色土 (ホーキブロック少含む)  
2 黒褐色土 (黒褐色粘土粒含む)  
3 黑褐色土 (ホーキブロック・黒褐色粘土粒含む)  
4 黑褐色土 (ホーキブロック多量含む)  
5 黑褐色土 (ホーキブロック多量含む)  
6 黑褐色土 (ホーキブロック多量含む)  
7 黑褐色土 (黒褐色粘土粒多量含む)  
8 黑褐色粘土粒  
9 黑褐色土 (黒褐色粘土粒多量含む)

1 黒褐色土 (ホーキブロック多量含む)  
2 黒褐色土 (ホーキブロック多く含む)  
3 黑褐色土  
4 黑褐色土

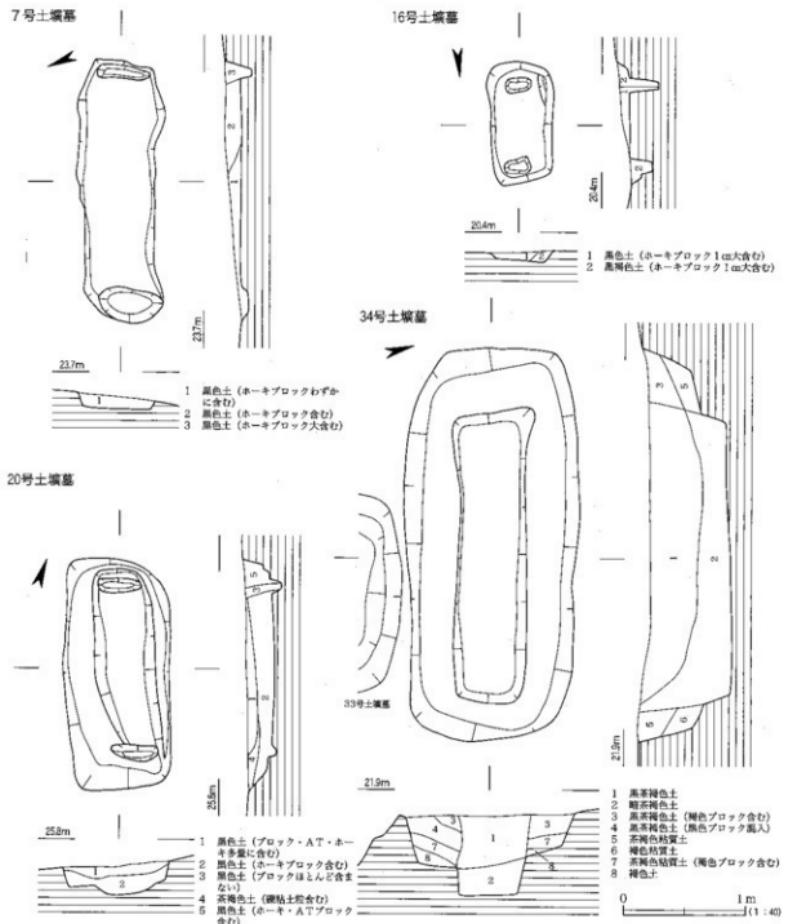
0 1 m (1:40)

第6図 1号・2号・6号土塚墓遺構図

**土塚墓群** 調査区のほぼ全域、丘陵平坦部から斜面にかけての標高22~25m付近で土塚墓38基を確認した。土塚墓は、さらには調査区外の丘陵尾根部分にも広がる可能性がある。土塚墓の中には木棺痕跡が確認できたものもあるが、ここでは総称して土塚墓とした。遺構図は木棺痕跡が確認できたものを図化し、その他は表に一括した。

土塚墓の主軸は、1~3・18・27・28・37・38号の8基が等高線に直交する他は、ほぼ等高線に沿う。墓塚の平面形はいずれも長方形もしくは隅丸長方形である。

土塚墓は規模によって大中小の3つに分けることができる。大型(長軸2m以上)は8基(1・2・7・18・28・29・34・36号)、中型(長軸1m以上2m未満)は19基(3・4・6・8・9・11・12・19~25・27・30・32・37・38号)、小型(長軸1m未満)は10基(5・10・13~16・26・31・33・35号)。8号~11号、33号~35号が

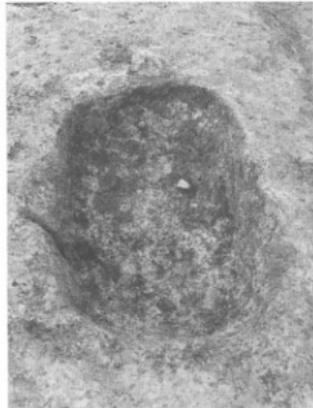


第7図 7号・16号・20号・34号土塙墓遺構図

並行して近接する他は、特に規則性はみられない。また、土塙墓間での切り合いはみられず全て単独で確認した。

木棺痕跡のわかるものは、1・2・6・7・16～18・20・22・26・34・36号の12基で、棺の規模は内法で長軸0.54～1.87m、短軸0.38～0.54mである。最大規模は2号で内法で長さ1.87m・幅0.38mである。棺は両小口に小口板を据えるための溝が残るもの（1・6・7・16・20・26号）と、さらに側板で小口板を挟み込む溝が残るもの（2・18号）がある。

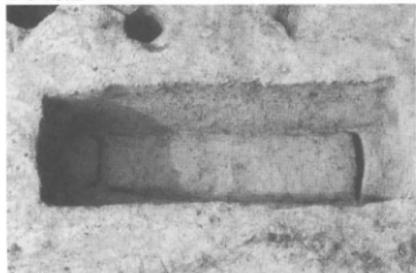
棺内に副葬品が遺存するものは、5号のほぼ床面で磨製石斧1点S2、38号の床面でガラス管玉が2点J14・J15出土したのみである。遺物は全体的に少なく、供獻土器は、29号・38号で供獻状態の土器が出土した。



5号土壙墓（西から）



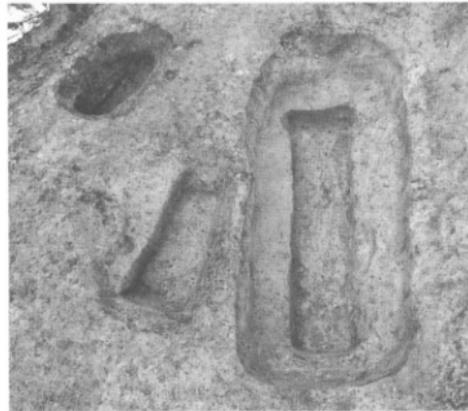
8号～11号土壙墓（東から）



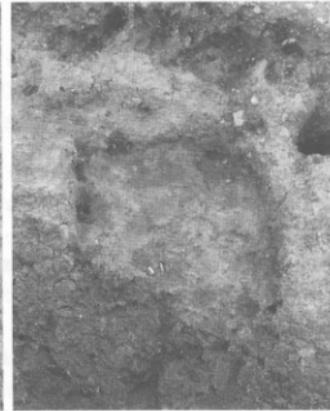
18号土壙墓（東から）



26号土壙墓（北から）



33号～35号土壙墓（東から）



38号土壙墓（南から）

## ガラス製管玉の分析調査

奈良文化財研究所 肥 塚 隆 保

はじめに ガラスは弥生時代前期末～中期初頭の頃、日本に伝えられたと言われている。弥生時代後期には、カリガラスは沖縄県から北海道の一部まで分布しており、一方、鉛バリウムガラスは九州から東海・関東あたりまで分布していた。日本列島におけるこれらガラスの分布についての詳細は不明で、より多くの出土資料について調査が必要である。

**分析試料と方法** 今回分析した試料は、38号土壤墓出土J14とJ15の合計2点である。それぞれの寸法と重量は前者が23.8～21.1mm(長さ)、7.5mm(径)、2.36g(重量)、後者は25.6mm(長さ)、6.7mm(径)、1.95g(重量)である。色調はいずれも灰緑色ないし灰青緑色で不透明である(図版22-1)。風化が進んでいるように見えるが、ガラス表面は硬い。また、いずれのガラス管玉表面にもブロック状のキレツが多数観察される。風化によるものか、管玉製作時の歪みが除去されていないために生じたものか明らかでない。また、いずれの試料中にも未溶解の小さな石英が残存していることも見られた(図版22-2)。未溶解の石英が残存しているのは、鉛バリウムガラスではよく見られる特徴でもある。一方、J14試料には巻き付け法の痕跡とも考えられるキレツも観察されるが、幅広のガラスを何らかの芯に巻き寿司のように巻きつけて製作されたのかもしれない。よく似たガラス管玉は内場山遺跡(兵庫県)や平原遺跡(福岡県)などでも発見されているが、いずれも緑色系である。

調査は顕微鏡観察と蛍光X線分析法による化学組成の測定、そして内部構造の調査にはCR法をもちいた。化学組成の調査には非破壊測定による定性分析に加えて、風化表面を取り除いて定量分析もおこなった。定量分析にはガラス標準試料(BCR、ECシリーズ、コーニング試料)によって校正した。測定条件は、対陰極:Mo(モリブデン)、励起電圧:20kV、電流:4mA、計数時間:300秒、雰囲気:真空中、装置:微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置(テクノス社650S)である。

CR法は、フィルムのかわりに放射線二次元センサーとしてイメージングプレートを使用して、デジタル処理をおこなう方法である。今回は微小点X線管(8μm)を用いた撮影をおこなった。

**結果** 分析調査の結果、いずれの試料からも主要成分として鉛(Pb)、バリウム(Ba)、珪素(Si)が検出され、その他にはナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)などが検出された(第19図)。以上のことからこれらのガラス管玉は鉛バリウムガラスで作られていることが明らかである。

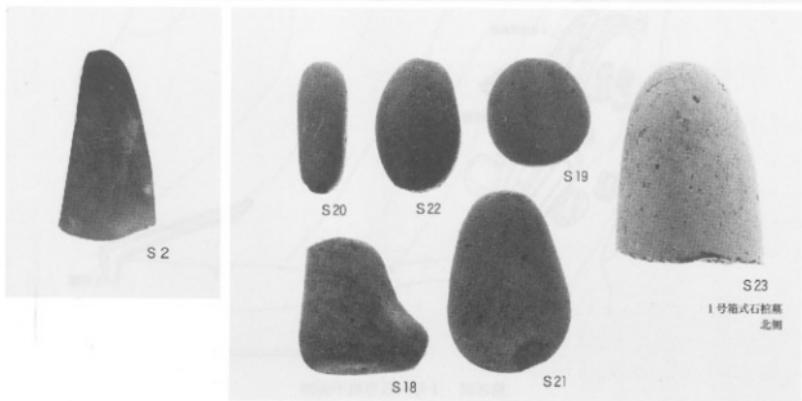
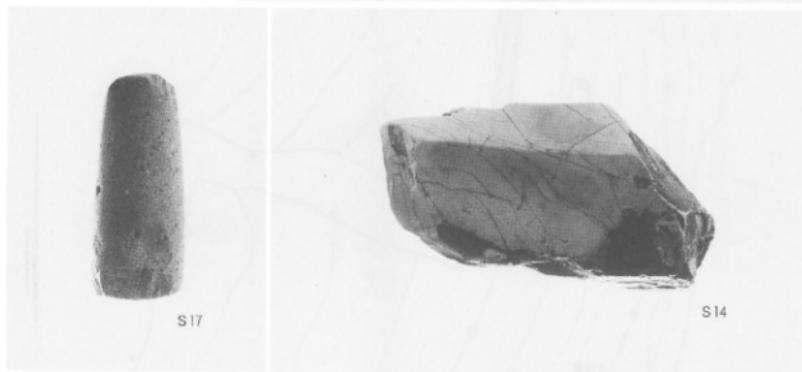
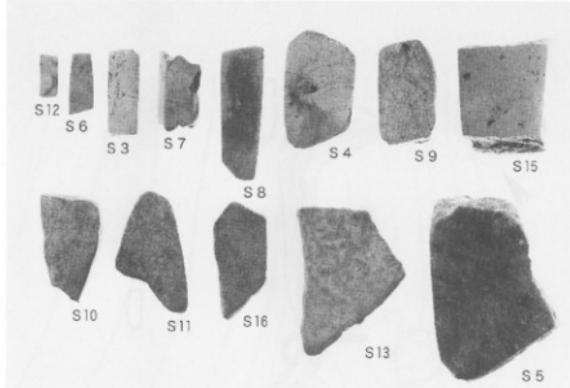
定量値については、表に示したが、完全に新鮮な部分を測定しているかは若干問題もあり、風化部分も混じっていると定量値に影響を与えることは言うまでもない。今回測定した試料はお互いに極めてよく似た値を示しており、これまで日本で出土した鉛バリウムガラスの平均的な化学組成とも一致している。しかし、着色因子となる酸化銅の値は小さく、もともと緑色を呈していたと仮定するとあまりにも酸化銅の含有量は少なく緑色を呈していた可能性は少なく、むしろ淡青などによる淡青色に着色されていた可能性も残る。いずれにしても、中国で作られた鉛バリウムガラスが日本に伝えられたものである。

CR法による内部構造調査の結果については、図版22-3に示した。内部の孔はストレートに貫通している。なお、内部には大小の気泡もかなり存在していることが示された。しかし、加工の痕跡は明瞭に検出されておらず今後再検討する必要がある。

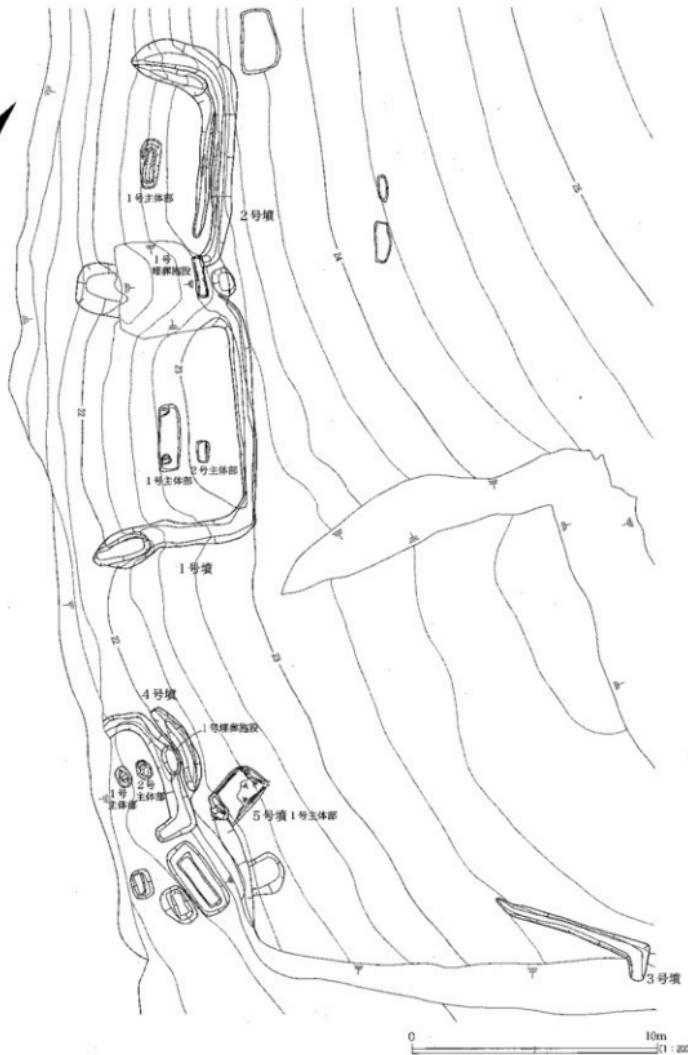
圖版13 2号溝(13)・3号住居埋土器(14・15・17・19~22)、鉄製品、玉類



磨製石斧(S 2)・砥石(S 3~S 16)・敲石(S 17~S 23) 圖版14



(S 2 1:2 他は1:3)



第8図 1号～5号填平面図

## 古墳群

調査区南東側の標高21~23mの斜面に方墳4基と横穴式石室墳1基を確認した。方墳の規模は、周溝を含めた一辺が、1号墳が最大で11.2m、南東の低い側に位置する4号墳が最小で4.6mである。方墳の墳丘は斜面の高い側を削り出して平坦にしていった低墳丘である。周溝は、全て斜面の高い側をコの字状に区画するものである。5号墳の周溝は遺存していない。断面形は全てU字状。また1号・2号墳は周溝の1辺を重ねており、周溝の北辺を東西方向に揃えて配置している。切り合い関係は2号墳が1号墳を切る。4号墳は北側周溝底に1号埋葬施設を造成した際、北側に周溝を新設している。主体部は3号墳を除いた4基で確認した。全ての古墳で人骨・副葬品は遺存していない。

### 1号墳

**1号主体部** 墳丘中央部からやや東に位置し、主軸方向をN141°Eにとる木棺墓。墓壙の平面形は隅丸長方形。掘り方規模は長さ2.50m・幅0.78m、検出面からの深さ0.11mである。墓壙底には両小口に小口板を据えるための溝を掘り込む。木棺は内法で長さ1.77mと推定される。墓壙底の高さは東側が2cm高く頭位は東と推定される。

**2号主体部** 1号主体部の北側約1.5m離れて、東端をほぼ揃えるように並行して位置する。主軸方向はN141°Eにとる。掘り方の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ0.82m・幅0.36m、検出面からの深さ0.17mである。掘り方内には、土師器大型壺23・甌24がそれぞれ1個体ずつ破碎した後、破片を重ねるように敷き詰められていた。

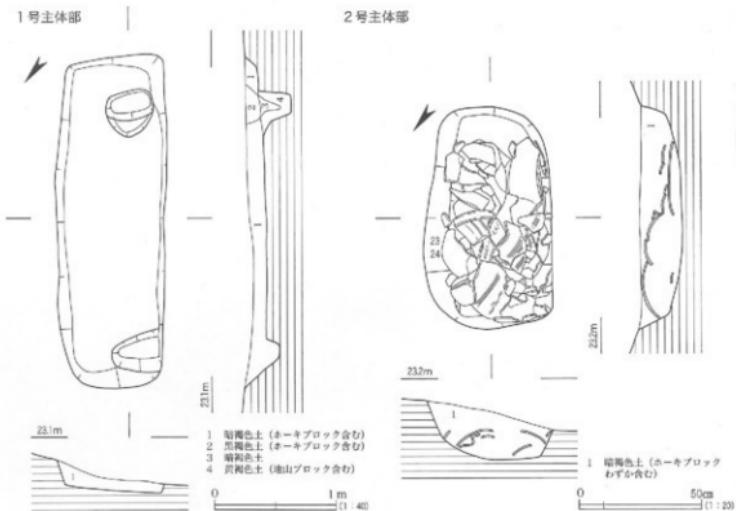


古墳群（北西から）



図版15

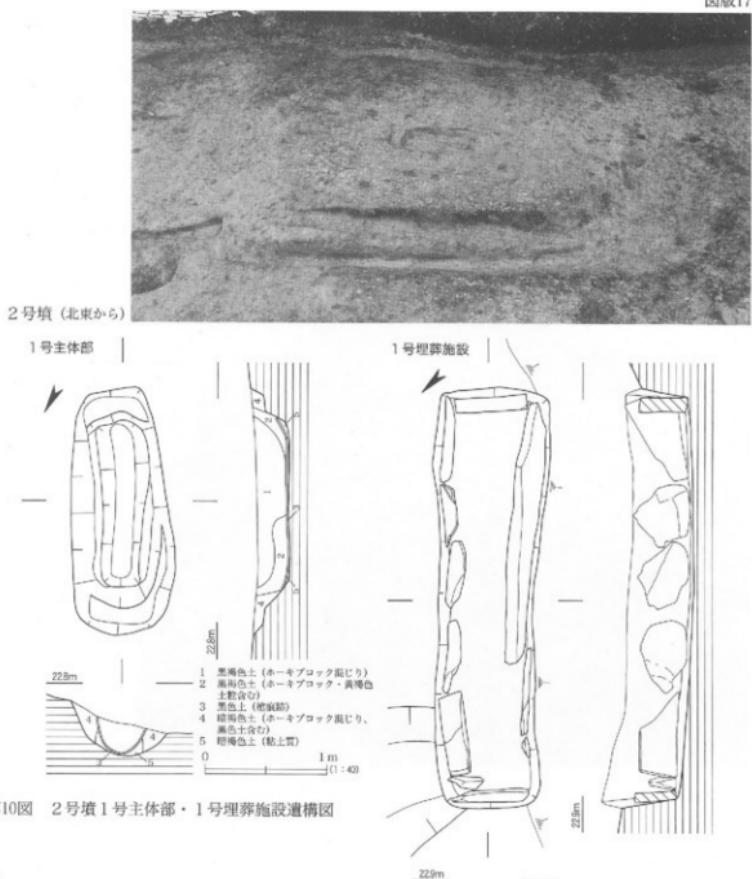
1号墳（北東から）



第9図 1号墳1号・2号主体部遺構図



図版16



第10図 2号墳1号主体部・1号埋葬施設構造図

## 2号墳

**1号主体部** 墓丘中央部に位置し、主軸方向をN150° E にとる剖竹形木棺墓。墓壇の平面形は隅丸長方形。掘り方は2段で、規模は上段が長さ1.87m・幅0.48m、深さ0.07m、下段が長さ1.26m・幅0.16m、深さ0.19m。検出面からの深さ0.26m。墓壇の断面形は緩やかなU字状で、直径約0.38m・長さ1.41m、深さ0.29mの剖竹形木棺痕跡を確認した。断面観察から、棺と墓壇底の間に幅0.4m・高さ0.11mの棺とほぼ同規模の範囲で、棺を固定するための暗褐色粘土質の粘土床を確認した。東側の棺床が西側より約1cm高く頭位は東と推定される。

**1号埋葬施設** 東側の周溝底、1号墳の周溝西側と接する部分に位置する箱式石棺墓。蓋石は遺存しておらず両小口石と側石のみが遺存していた。主軸方向は主体部と並行しN133° E にとる。墓壇の平面形は長方形で、掘



3号墳（西から）



4号墳（南から）

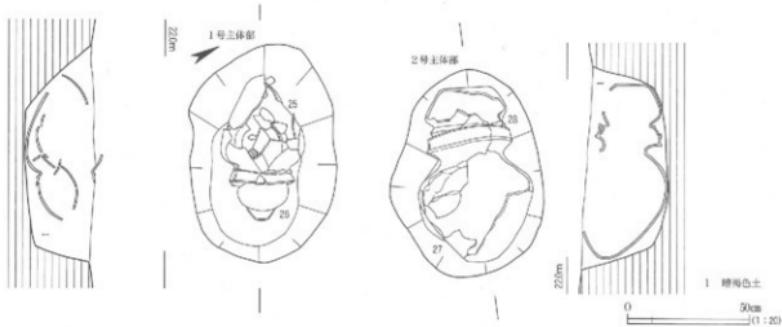
り方規模は長さ1.64m・幅0.35m、深さ0.19m。石棺は、墓壙底の両小口に直に各1枚ずつ板石を立て、これを挟み込む形で北側5枚、南側2枚の板石を立て据える。棺底は東側が3cm高く頭位は東と推定される。

#### 4号墳

**1号主体部** 墳丘中央に位置する土器棺墓。墓壙の平面形は不整な梢円形で長さ0.55m・幅0.36m、検出面からの深さは0.28mである。主軸方向は周溝に並行しN116°Eである。土師器甕25を棺身、甕26を棺蓋とする合口土器棺で、棺の長さは0.54mでほぼ完形であった。棺は棺身の口縁部を水平面に対して3°上方向に向けた状態で埋置していた。

**2号主体部** 1号主体部に並行し北側0.9m離れた墳丘上に位置する土器棺墓。墓壙の平面形は不整な梢円形で長さ0.64m・幅0.32m、検出面からの深さは0.32mである。主軸方向は周溝に並行しN110°Eである。土師器甕27を棺身、甕28を棺蓋とする合口土器棺で、棺の長さは0.71mでほぼ完形であった。棺は棺身の口縁部を水平面に対して10°下方向に向けた状態で埋置していた。

**1号埋葬施設** 北側の周溝底に位置する土壙墓。墓壙の平面形は不整な隅丸長方形。規模は長さ0.98m・幅0.42m、深さ0.24mである。



第11図 4号埴1号・2号主体部遺構図

図版19



4号埴1号主体部(南から)



4号埴2号主体部(北から)



26



25



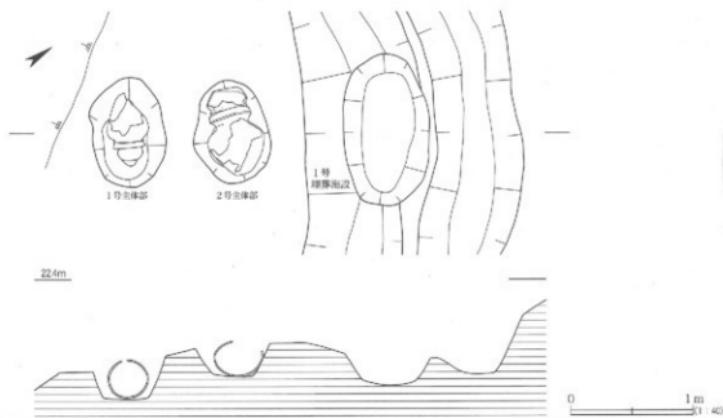
27



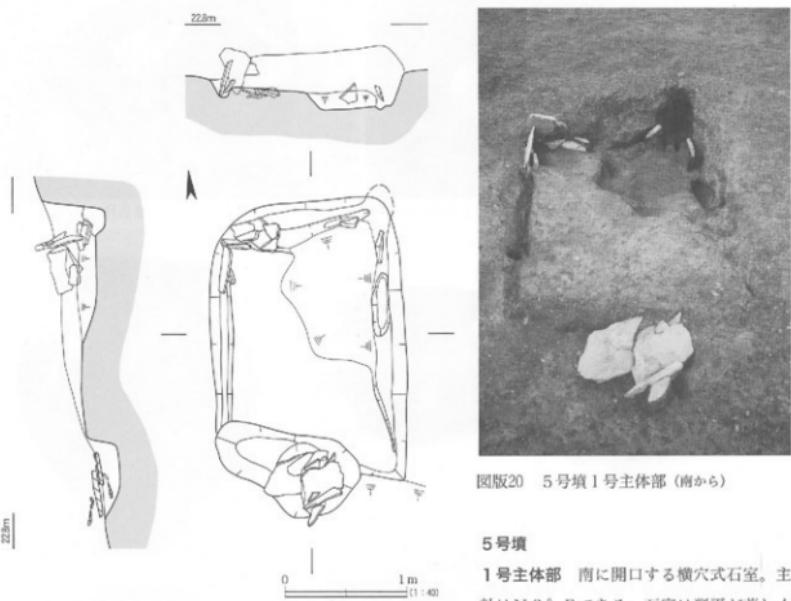
25



28



第12図 4号墳1号埋葬施設遺構図



図版20 5号墳1号主体部(南から)

第13図 5号墳1号主体部遺構図

く擾乱を受けており、掘り方には基底部と玄門部の閉塞用に使用したと思われる石材片が僅かに遺存する。床面には奥壁と側壁を立て据えるための溝が掘り込まれており奥壁を側壁が挟み込む。玄室の規模は、内法で長さ1.65m・幅1.15m。玄門寄りで刀子片F1が出土した。

### 5号墳

**1号主体部** 南に開口する横穴式石室。主軸はN 6° Eである。石室は棚平が著しく玄室の基部のみを確認した。玄室内は大き

**1号箱式石棺墓** 調査区の中央、標高22.5m付近に位置する。16号住居を切る。主軸方向はN118°Eである。墓壙の平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.67m・幅0.88m、検出面からの深さは0.8mである。墓壙底には、両小口と両側壁に、石棺材を立据えるための溝が掘られる。石棺は、両小口に各1枚ずつ板石を立て、これを挟み込むかたちで北側壁2枚、南側壁1枚の板石を立て据える。この段階で両小口石および両側石の最後部はほぼ水平に揃い、蓋石との接地面を水平に調整し平滑にしている。蓋石は1枚石を置く。石棺の規模は、内法で長さ1.31m・幅0.51m、深さ0.56mである。棺床は、10×15cm・厚さ1~2cm大の板石を敷き詰める。棺底の中央付近から、人骨とともに刀子F2が刃を南側、刃先を東側にして水平の状態で出土した。

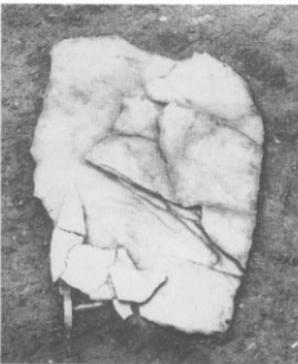
**土壙** 調査区のほぼ全域で25基確認した。平面形は隅丸長方形が最も多く、土壙墓の可能性が考えられるものもある。規模は長さ0.5m~2.4m・幅0.2~1.5m、検出面からの深さは0.1~1.0mである。10号土壙は調査区東側の標高22m付近に位置し、後世の掘削が著しく掘り方の基底部が僅かに遺存するもので、底から土師質土器坏1点が出土した。14号土壙は調査区中央の標高22mの斜面に位置し空風輪・火輪とともに人骨片が出土した。中世墓の可能性が考えられる。

#### 溝

**1号溝** 調査区の中央で1号掘立柱建物の西側に接し東西方向に延びる。長さ6.8m・幅2.3m、検出面からの深さ0.2mである。断面は緩やかなU字状を呈する。埋土中に弥生土器片、瓦質土器片を含む。

**2号溝** 調査区の中央やや東寄りに位置し、29号土壙墓に切られる。長さ6.7m・幅2.2m、検出面からの深さ0.5mで、南東から北西方向に延びる。南東側は掘削により遺存しない。土壙墓と主軸が沿うため、土壙墓に伴う溝の可能性がある。埋土中から弥生土器壺13、砥石1点が出土。

**3号溝** 2号溝の西側約8m離れて位置し、ほぼ南北方向に延びる。北側は調査区外へ延びる。長さ4.5m・幅0.3m、検出面からの深さは0.1mである。埋土中から瓦質土器片が出土。

F 2  
(1 : 3)

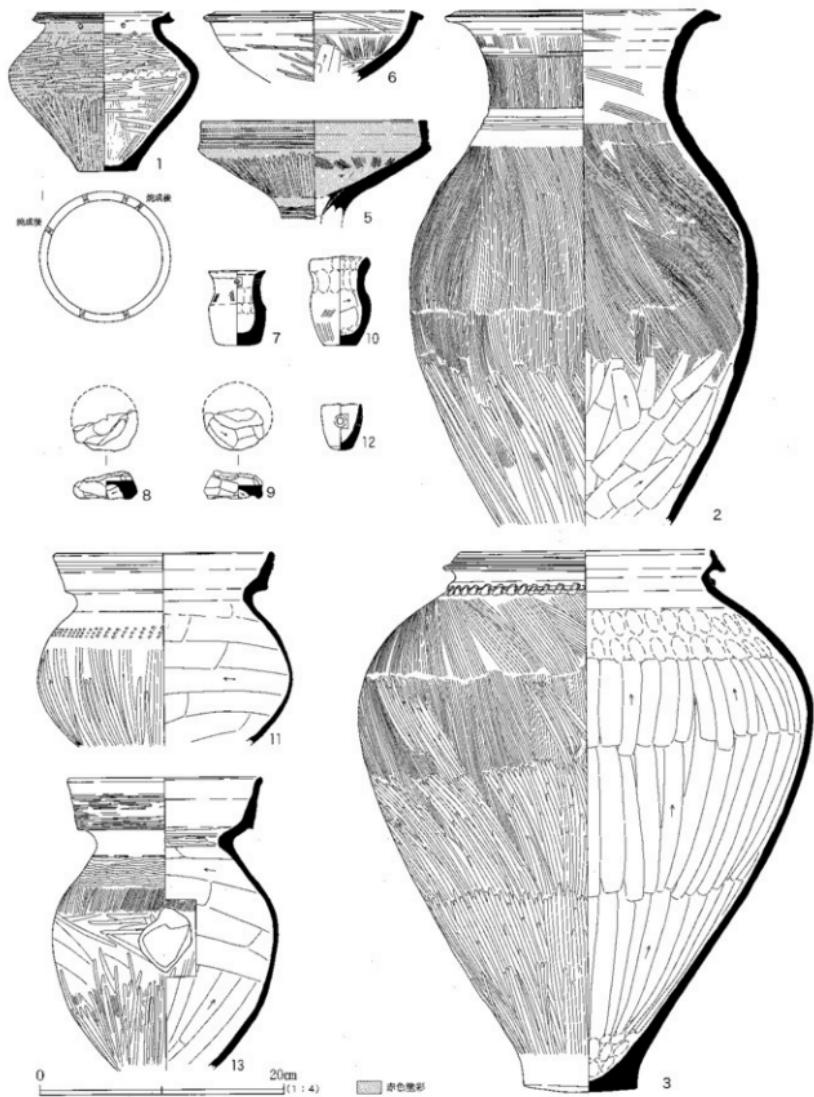
1号箱式石棺墓 蓋石(東から)



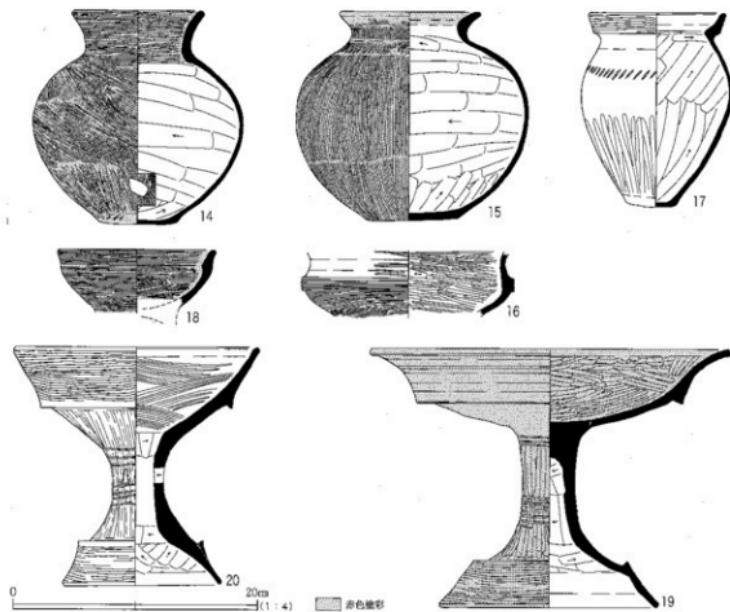
石棺(西から)



掘り方(西から)



第14圖 1号・5号・6号・8号・9号住居、2号溝出土土器



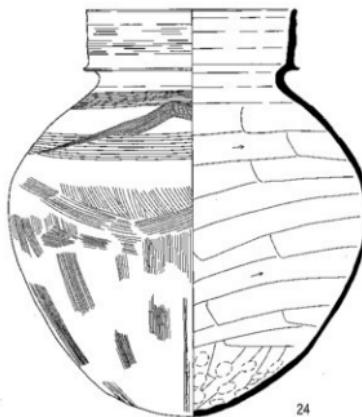
第15図 3号住居埋土上層廐棄土器

#### IV まとめ

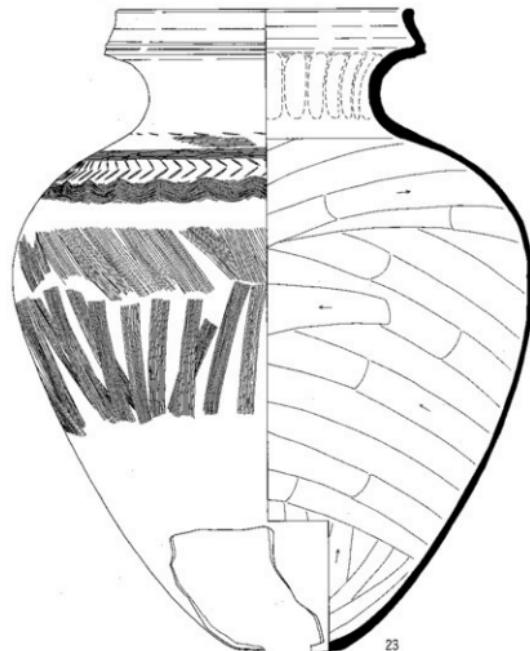
以下、各遺構の時期および変遷について検討し、発掘調査によって分かったことを整理しまとめとしたい。  
出土土器について

今回の調査で出土した土器は、大きく弥生時代中期から古墳時代前期のものである。器種としては、壺・大型壺・甕・大型壺・高杯・器台・鉢・ミニチュア土器・手捏土器が出土している。以下、遺構に伴うものを中心におく時期を検討する。

1号住居出土の小型壺1は、口縁端部が短く上下に拡張され内傾する面をなし、擬四線を施す。体部内外面へラミガキ。5号住居床面出土の広口壺2は体部内面上半ハケ目、体部外面下半ヘラミガキ調整を施す。壺3は指頭圧痕貼付突帯をもつ。時期は弥生時代中期中葉である。9号住居床面出土の壺4は、口縁部外面を一部ナデ消す。時期は土井編年の腹部I・II期に併行する。2号溝埋土出土の壺5は口縁部外面を一部ナデ消し、体部外面下半ヘラミガキ。時期は上種第5貯藏穴7号期よりやや古い要素をもつ。3号住居埋土上層の廐棄土器の壺6は外面頸部以下ハケ目調整、内面頸部直下まで横方向のヘラケズリ。壺7は口縁部外面櫛描沈線、内面頸部直下までヘラケズリ。時期は阿弥大寺二期に並行する。高杯19は外反する杯部と長く裾広がりに聞く脚台部からなる。杯部口縁部と脚台部とも複合口縁状。杯部外面はヨコナデ、内面はヘラミガキ。時期は阿弥大寺三期に並行する。器台20は上外方へのびる上台部と外方へ開く脚台部。口縁部および脚端部外面櫛描沈線文後ナデ。時期は服部



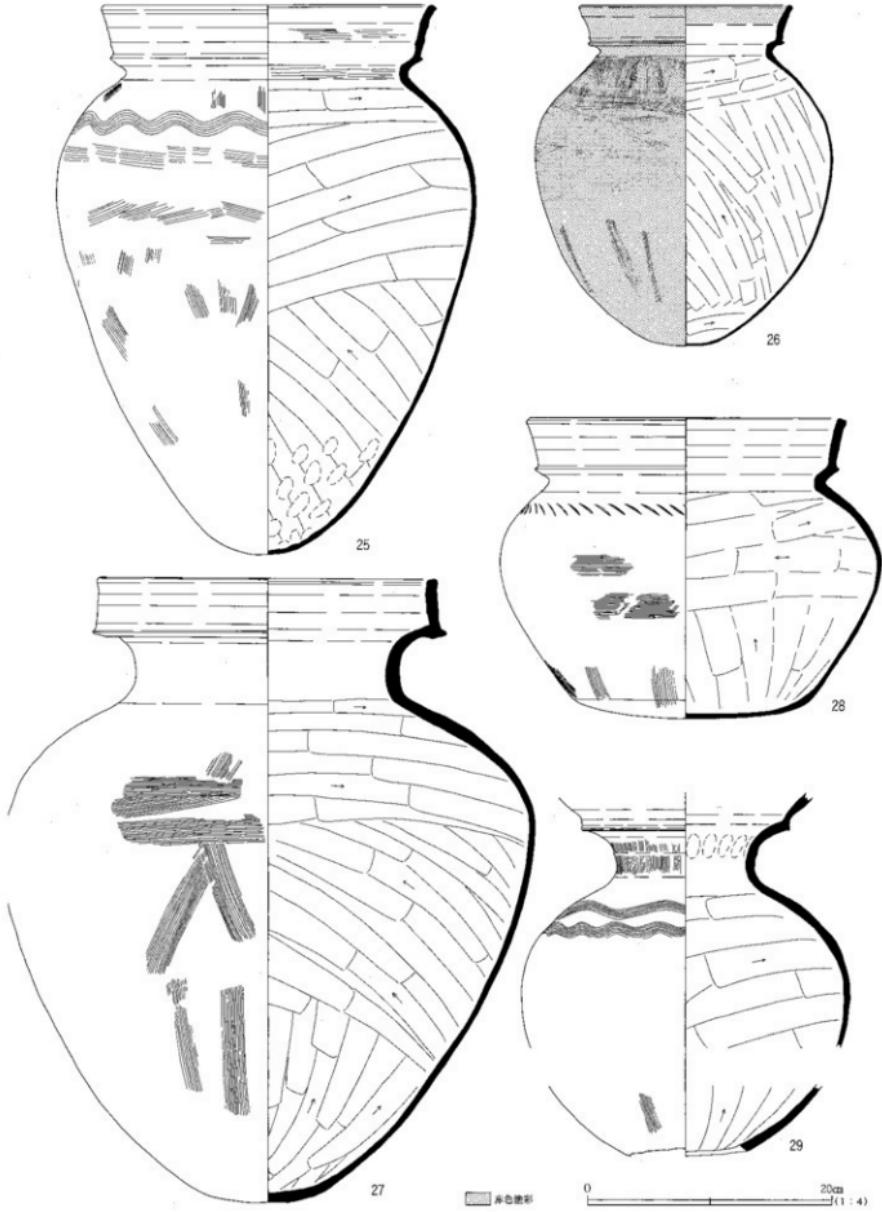
24



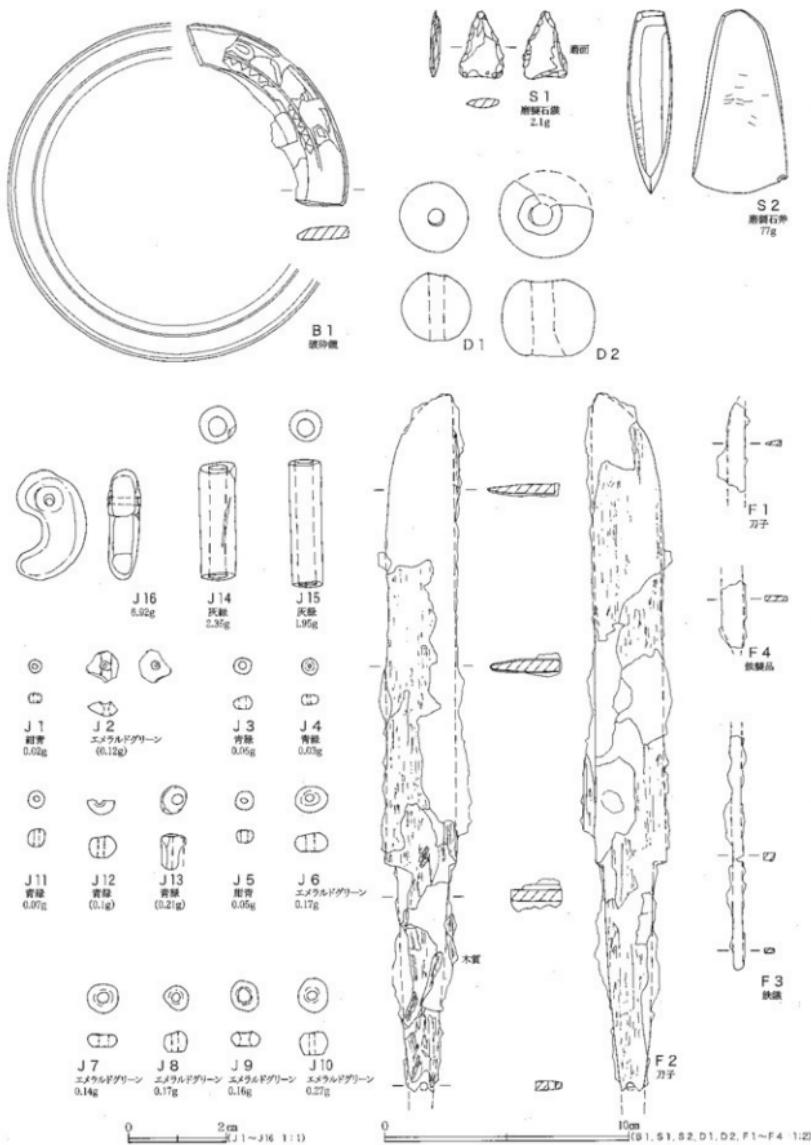
23

0 20cm  
(1 : 4)

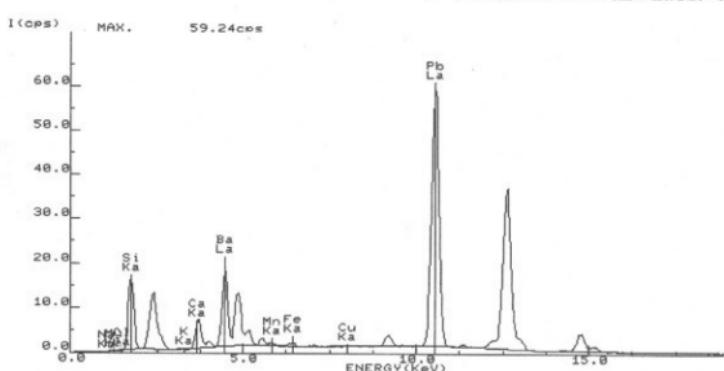
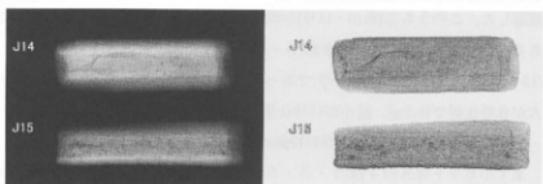
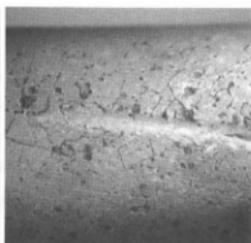
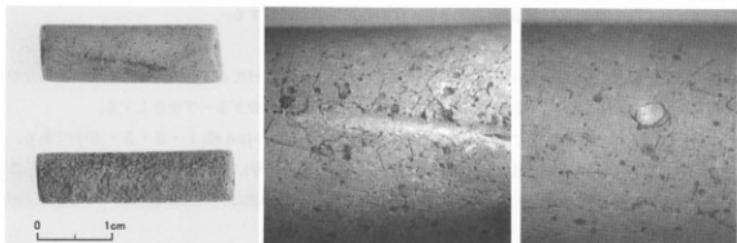
第16図 1号填2号主体部出土土器



第17圖 4号墳1号・2号主体部出土土器



第18図 破碎鏡・鐵製品・玉類・石製品・土製品



第19図 ガラス管玉J15の蛍光X線スペクトル

表 ガラス管玉の分析値 (wt%)

	N <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	BaO	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	PbO
J14	6.40	0.02	0.10	42.00	t.t	1.90	18.00	0.10	0.10	0.00	37.00
J15	6.10	0.00	0.10	43.60	t.t	1.90	18.30	0.10	0.10	0.00	36.30
日本出土(33.0)				35.98			8.17				28.46

I・II期に併行する。4号墳1号主体部土器棺土師器の壺26は、口縁部は外傾する複合口縁で、体部はやや肩の張る倒卵形で器壁は薄い。時期は宮ノ下3B・7号住居址期に併行する。

#### 遺構について

住居 16棟を確認した。調査区中央付近の丘陵高所から南斜面にかけてと、調査区東側の緩斜面部分の大きく2グループに分かれる。以下、調査区中央付近のグループをA、東側のグループをBとする。

Aは6棟(1~5・16号)で、このうち住居の全容が確認できたものは4棟(1・3・5・16号)である。住居間の切り合いはない。住居の平面形は円形で、4本柱3棟(1・5・16号)、6本柱1棟(3号)であった。これらは全て中央ピットの両側に小ピットが直線的に並ぶものである。床面規模は、3号住居が最大で推定32.6m<sup>2</sup>、最小が16号住居で推定11.2m<sup>2</sup>である。

次にBについてみると、住居間の切り合いや後世の掘削等により全容の分かるものが少ないが10棟(6~15号)確認した。このうち2棟(10・11号)が焼失住居である。住居の全容が確認できるものは4棟(6・10・13・15号)である。住居の平面形は、円形3棟(6・10・13号)、隅丸長方形1棟(15号)で、2本柱は1棟(15号)、4本柱は2棟(10・13号)、5本柱は1棟(6号)であった。このうち4本・5本柱のものは中央ピットをもつ。床面規模は、最大が6号住居で18.9m<sup>2</sup>、最小が15号住居で推定9.5m<sup>2</sup>である。

今回の調査で確認した住居群の特徴は①小ピット、②焼土面である。

まず小ピットはAの4棟(1・3・5・16号)に認められ、深さ0.33~0.65m・小ピット間距離1.06~1.77mである。特に使用方法のうかがえる資料はなかったが、各住居の共通点として、小ピットを結んだラインが主柱穴間のほぼ二等分線上にある。6本柱の3号住居は小ピットを結んだラインがほぼ対角の主柱穴に沿う。この小ピットを結んだラインは全て等高線に直交するもので、ほぼ南北方向である。小ピットはAにしか認められず、Bとの時期の違いか。

次に焼土面についてみると。両グループの共通点は、焼土の厚さが他の住居と比較して2~5cmほど厚い。これは照明用というより、高熱によって床の一部が赤変し硬化したもので焼土塊に近い。この焼土はAで2棟(3・5号)、Bで2棟(6・8号)確認している。このうち柱穴が分かるもの3棟(3・5・6号)について焼土の位置を観察すると、いずれも各柱穴を結んだラインより内側に位置しており、中央ピットに近い傾向がうかがえる。この焼土面の厚い住居の共通点は3・5・6号住居で砥石・敲石・磨石、3・8号住居で安山岩質の剥片が出土しており、住居内から石器が多く出土する傾向がある。

出土遺物は、多量の土器の他、ミニチュア土器、手捏土器、勾玉、ガラス小玉、石鐵、刀子、磨製石鐵木製品、剥片、敲石、磨石、砥石と多種にわたる。住居の時期は、1~5・16号で弥生中期から後期にかけての土器、6~15号で弥生後期の土器が出土しており、住居間の切り合い関係も含めると、前者で2時期、後者で少なくとも3時期に分けることができる。弥生中期に丘陵高所に1~4号、統いて5・16号、後期になると丘陵東側の緩斜面に7・8・10号、統いて11・12・14号、最終段階で6・9・13・15号へと変遷する。本遺跡の住居はおおむね弥生中期から後期の間、少なくとも5時期にわたって変遷し営まれたものである。

ガラス小玉について ガラス小玉が3棟の住居(3・8・10号)から出土した。色調は全て青色系である。出土したものの中には、ガラス小玉片に錐状のもので穿孔したJ2(3号)、不良品J13(10号)などがみられた。倉吉市内の遺跡では弥生中期の住居からの出土例はなく、本遺跡が初見である。本遺跡では、確認できた住居16棟のうち3棟からガラス小玉が出土しており、期間も弥生時代中期から後期にかけて比較的長期間にみられた。

弥生時代の住居内からガラス小玉が出土した例は、倉吉市内では5遺跡8棟である。住居の時期はいずれも弥生時代後期前半のもので、イザ原古墳群1号住居(1点)、中尾遺跡4号住居(1点)、沢ベリ遺跡1次1号住居(1

点)、沢ベリ遺跡2次S I 01(4点)・S I 02(2点)・S I 04(1点)、沢ベリ遺跡3次I号住居(14点)、後中尾遺跡10号住居(1点)・15号住居(1点)である。色調は全て青色系である。後中尾遺跡を除く4遺跡は四王寺山周辺に位置しており、近くの拠点集落からの供給を受けたと考えられ、同じ流通圏内に属したムラを想像させる。

**石鏡について** 3号住居の床面から1点出土した。安山岩質。基部は四形で平形。中央断面は菱形。先端鋭い。基部と刃部をのぞき磨面が認められる。長さ28mm・厚さ4mm・重さ2.1g。未製品。弥生時代の磨製石鏡および未製品の出土例は、管見する限り県下では報告されていない。

**破碎鏡について** 焼失住居である10号住居床面から銅鏡片が1点出土した。外縁面と破面はよく研磨されており破碎鏡と考えられる。内側の面は割れたままである。穿孔はみられないため、装着品であったかは不明である。鏡は、腐食と表面の剥離が著しく鏡式は特定できないが、鋸齒文と流雲文と思われる文様が一部認められる。復元径約14cm。船載の後漢鏡か。

弥生時代の銅鏡の出土例は、県中部では東郷町宮内第1遺跡(D区) S I 01内から内行花文鏡1点が出土している。時期は弥生時代後期。破碎鏡とみられるものは、県東部では青谷町青谷上寺地遺跡包含層出土の船載の後漢鏡片(内行花文鏡)、小型做製鏡片(重圓文鏡)がある。時期はいずれも弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭である。鳥取市秋里遺跡S D09埋土出土の内行花文鏡片がある。県西部では大山町・淀江町にまたがる妻木晚田遺跡の妻木山地区MKSI-119内床面直上で鏡片(鏡式不明)、松尾頭地区MGSI-45床面直上で船載の後漢鏡片(内行花文鏡)、松尾城地区MJSI-11bで紐部分(内行花文鏡)がある。時期は弥生時代後期中葉から後葉。青谷上寺地の2点、松尾頭地区MGSI-45の1点はいずれも破面円弧部を研磨するもので、青谷上寺地遺跡の小型做製鏡(重圓文鏡)は5カ所に穿孔がある。

本遺跡出土破碎鏡は、炭化材や焼土塊の下の床面から出土した。住居の床面に土器がほとんど無かつたため、生活用品を持ち出した後に焼失した可能性が高い。出土状況から破棄されて残されたのかは不明であるが、祭祀的性格も考えられる。

**土壙墓群** 土壙墓を38基確認した。木棺痕跡を確認したものが12基あった。29号の供獻土器と思われる壙13は、土井編年の上種第5貯藏穴7号期よりやや古い要素をもち、おおむね弥生後期末に築造されたと考えられる。土壙墓間での切り合いはみられず、全て単独で検出した点を踏まえると、弥生後期末頃に比較的短期間に営まれた集団墓と考えられる。したがって、土壙墓群は調査区東側の弥生後期の住居と同時期に同一丘陵に存在しており、集落と墓域との間隔が約20m以上の空間を設けて区別されている。

**ガラス管玉について** 38号土壙墓底からガラス管玉が2点出土した。土壙墓の約1/2以上が掘削されており副葬時の数量は不明である。色調はいずれも灰緑色ないし灰青緑色で不透明で、巻き付け法で制作された鉛バリウムガラスである。弥生時代のガラス管玉の出土例は少なく、県中部では、鉄劍・碧玉管玉4点・綠色凝灰岩製管玉1点とともにガラス管玉が29点出土した東郷町宮内第1遺跡1号墓第1主体の1遺跡である。宮内1号墓出土ガラス管玉と大きさを比較すると、本遺跡出土ガラス管玉のほうが長さ・径ともに上回る。宮内1号墓のガラス管玉のつくりが小柄でシャープなのに対し、本遺跡のガラス管玉は大柄で厚ぼったい印象をうける。

**古墳群** 調査区南東斜面で方墳4基と横穴式石室墳1基を確認した。一辺が1.2m以下の比較的小規模な方墳である。方墳の周溝は斜面の高い側をコ字状に区画するもので、1・2号墳は周溝の1辺を接している。古墳の築造時期は、出土土器から1号墳がおおむね4世紀中葉に築造され、ほぼ同時期に2号墳・3・4号墳と比較的短期間に連続して築造されている。その後、古墳群は一度断絶し、7世紀代に小型の横穴式石室を主体部とする5号墳が築造される。

以上、今回の発掘調査の概要について述べた。本遺跡は丘陵の南斜面部分の調査であり、集落の全容は明らか

210.2  
Kur  
(113)

でないが、弥生時代中期から後期にかけての住居のまとまりと土壙墓群との関係を確認することが出来た。図書館  
弥生時代中期の住居から出土したガラス小玉をはじめ、ガラス管玉や破碎鏡などこの地域の新しい資料を得ること  
とができる。高原遺跡の住居の規模は他の遺跡と比較しても決して大規模ではないが、ガラス小玉や管玉、破碎  
鏡などが出土しており、弥生時代中期から後期にかけて、遺跡周辺地域の拠点集落であったと考えられる。今後  
は予想される周辺の調査によって集落の全体像が明らかになることを望む。

#### 註

- 1 土井殊美 「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986年
- 2 横鉢輝雄 「イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1983年
- 3 横鉢智津子他 「中尾遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1992年
- 4 畑田廣幸 「沢べり遺跡発掘調査概報」 倉吉市教育委員会 1975年
- 5 竹宮恒也子 「不入岡遺跡群発掘調査報告書ー不入岡遺跡・沢べり遺跡2次調査ー」 倉吉市教育委員会 1996年
- 6 畑平治也 「沢べり遺跡第3次発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 2001年
- 7 原田雅弘他 「宮内第1遺跡・宮内第4遺跡・宮内第5遺跡・宮内2、63、64、65号墳」 財團法人鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター 1996年
- 8 北浦弘人他 「青谷上寺地遺跡 3」 財團法人鳥取県教育文化財団 2001年
- 9 山井雅美他 「秋里遺跡(西皆竹)」 財團法人鳥取県教育文化財団 1990年
- 10 松本 哲也 「妻木喚田遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ」 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査班 2000年

#### 参考文献

藤丸詔八郎 「鐵鏡の出現に関する一考察—北部九州を中心として—」『第30集(上)古文化談叢刊20周年 小田 富士雄代表選輯記念論集(1)』 九州古文化研究会 1993年

#### 報告書抄録

書名	鳥取県立埋蔵文化財調査報告書						
著者名	一般財団法人大河内特定埋蔵文化財工事に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻次	-						
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第133号						
著者名	岡本哲也						
調査期間	倉吉市教育委員会						
所在地	〒682-8511 鳥取県倉吉市萬町722番地 TEL 0858-22-4419						
免行年月日	西暦2002年3月29日						
所取遺跡名	ロード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所 在 地	市町村: 遺跡記号					
高原遺跡	倉吉市宇喜原・加賀・ 古墳	31203: 3 OTT	35° 28' 40"	131° 45' 36"	20000929~20010201 20010618~20030111	一般財団法人大河内特定埋蔵文化財工事	
所取遺跡名	種別	主な時代: 主な遺物	主な遺物	特記事項			
高原遺跡	集落	弥生時代: 穴式住居 斜面窓 住居跡構築物 獨立住居物	16棟 7基 2件 1件	弥生土器・土器底・瓦底器・土器質土器・瓦質土器・網 縞・刀子・鉄器・ガラス管玉・ガラス小玉・玉珠・土 器・磨製石器・磨製石斧・砾石・磨石・磨石	弥生時代中期から後間にかけての集落と土器墓群		
	古墳	弥生時代: 土塚墓 古墳時代: 古墳	3基 2基				
	落し穴	古墳時代: 古墳 土壤	(うち中世? 1基) 5基 2基 (うち中世土壤 1基)				

## 高原遺跡発掘調査報告書

一般県道津原穴沢線地方特定道路  
整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成14年3月29日 印刷

平成14年3月29日 発行

編集 発行 倉吉市教育委員会

印刷 北陽印刷工業  
製本